Kadokawa Comics A

まおゆう 魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」 第十一巻

Comic Ishida Akira
Author Touno Mamare

漫画 石田あきら
原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞+toi8

KCA264-14
角川書店

9784041017326
1920979005808
ISBN978-4-04-101732-6
C0979 ¥580E
定価:本体580円(税別)
発行:株式会社KADOKAWA
KADOKAWA

まおゆう 魔王勇者
「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」
第十一巻

まおゆう

Archenemy and Hero 魔王勇者

——「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」——

第十一巻

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉鉄之丞・toi8

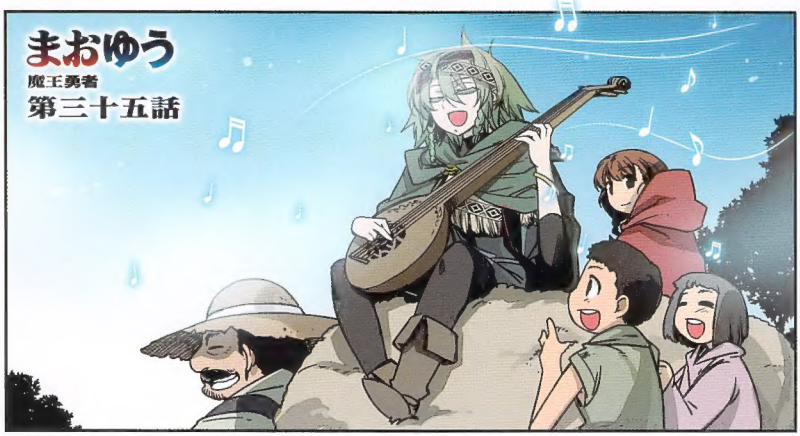
Kadokawa Comics A

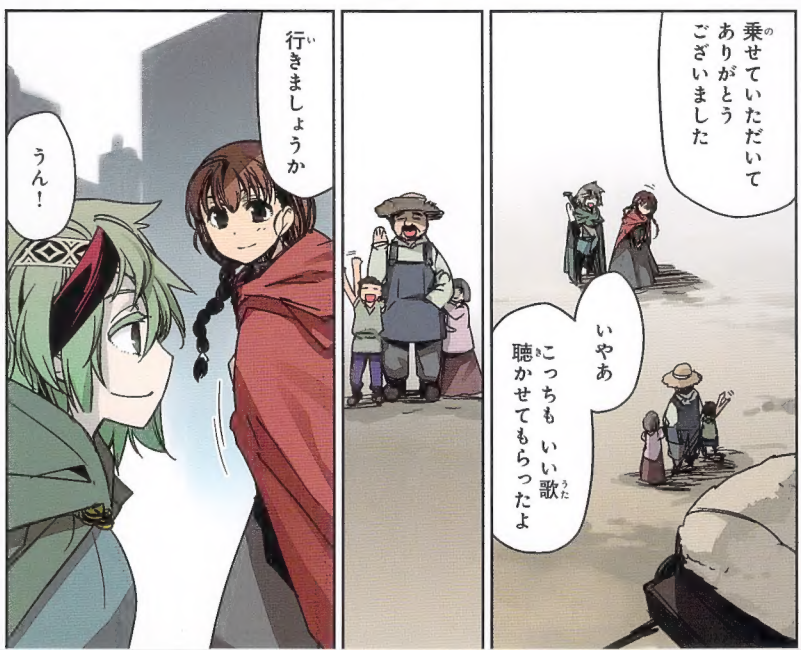
Kadokawa Comics A
まおゆう 魔王勇者
「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」 第十一巻

Comic
Ishida Akira
Author
Touno Mamare
漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉鉄之丞・toi8

KCA264-14
角川書店

KADOKAWA


まおゆう
魔王勇者
第三十五話


乗せていただいてありがとうございました
いやあ こっちも いい歌聴かせてもらったよ
行きましょうか
うん！

Archenemy and Hero
35th chapter

第三十五話
古い物語

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞+toi8
おおかみ
Archenemy and Hero
魔王勇者
――「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」――

まおゆう
魔王勇者

第十一巻

漫画 石田あきら　原作 橙乃ままれ

キャラクター原案 水玉螢之丞+toi8

第三十五話 Archenemy and Hero 35th chapter 001

古い物語

第三十六話 Archenemy and Hero 36th chapter 043

俺だって丘の向こうが見たいんだ

第三十七話 Archenemy and Hero 37th chapter 103

なぜここにあれがある

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」

Archenemy and Hero

第十一巻

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ

キャラクター原案
水玉螢之丞・toi8

コラムページ
竹之内大輔(レッカ社)
野村昌隆

まおゆう 第十巻のあらすじ

Lectures on Archenemy and Hero
Outline of volume.10

世界の変革を目指すため、ともに歩み始めた「魔王」と「勇者」。二人が人間界の「冬越し村」を拠点に活動を始めてから3年がたち、魔王が「紅の学士」としてもたらした数々の技術や知識は、「冬の国」や「鉄の国」、「氷の国」といった南部の人々の暮らしを大きく改善した。国力をつけた三国は「三国通商同盟」を結成。「聖王国」や「中央聖光教会」との対決を覚悟で「女騎士」が所属する「湖畔修道会」を新たな国教と定め、経済面・精神面の双方における自立をはかった。

こうした情勢の変化を受け、人間界最大の経済団体「同盟」も動き出した。同盟の幹部「青年商人」は、小麦を用いた二大通貨制の確立を画策。また「火竜公女」との邂逅を経て、魔界への販路拡大を念頭に「火竜大公」と塩の通商協定を締結。魔界と人間界が地続きだと判明したのちは、青年商人は火竜公女を通じて地下世界の街道整備を提案し、大々的な土木工事が始まることになった。

一方、人間界での改革がひと段落したことを受け、魔王は「黒騎

士」に変装した勇者と「メイド長」をともなって地下世界に帰還。魔族の大会議「忽鄰塔（クリルタイ）」を開催し、八大氏族の長を集めた大部族会議の席上で人間との停戦を訴えた。ところが、そのさなかで魔王が刺客に狙撃される事件が発生。魔王は重体となるが、この機に反抗勢力をあぶり出そうと考え、自身の死亡を発表させた。すると、両目に魔王の刻印をもつ蒼魔の王子が、父・蒼魔王を弑逆して即位。「蒼魔の刻印王」として、新たな魔王候補に名乗りをあげる。しかし、その後に刻印王の陰謀が露見。刻印王は、伏せていた兵を動かして魔王に反旗を翻すが、勇者や族長たちに撃退されて自領へと戻っていった。

戦いののち、勇者は兜を脱いで族長たちに正体を明かすとともに、魔王の胸の内を代弁。魔王の想いを知った族長たちは結束し、そんな彼らに権威を預けた魔王は地上へと戻った。

館で静養する魔王は、勇者や女騎士、メイド長らと、久々にゆったりとした時間を過ごす。そんななか、かねてから思うところがあった「メイド姉」は、自らの運命に出会うべく、館での勤めを辞して旅立っていった。そして、魔王たちがほっとひと息ついたのも束の間。地下世界で孤立した刻印王が、一族の戦士を引き連れて人間界へ侵攻し、一夜にして白夜の国を制圧。事態は風雲急を告げる――。

魔王

外なる図書館で得た知識をもとに、世界の変革を目指す魔族の王。現在は「忽鄰塔〈クリルタイ〉」で刺客に襲われた際の傷もほぼ癒え、地上に侵攻した蒼魔族の対応に当たる。

メイド長

魔王が幼い頃から世話をしている側近。彼女の幸せを願っており、彼女の夢をかなえるために手足となって尽力している。

メイド姉

魔王の館でメイドとして働く元農奴の少女。「自分の成すべきこと」を探すために旅立ち、現在は「光の精霊」の伝説を追っている。

奏楽子弟

魔王が魔界で育てていた子弟のひとり。詩や音楽に造詣が深い。「聖骸」を探す旅の途中でメイド姉と出会い、行動をともにする。

メイド妹

姉とともに魔王の館で働くメイド。食いしん坊が高じて料理に目覚めた。日々新たな料理を考案。レパートリーを増やしている。

傭兵隊長

傭兵部隊を率いる隊長。かつて中央貴族に雇われ、冬の国の軍と戦った。その後は野盗として氷の国の外れに潜伏していた。

王弟元帥

聖王国の王の弟で、人間界の英雄と目される実力者。マスケット銃を大量生産し、民兵を主力とした第三次聖鍵遠征軍を起こした。

東の砦将

聖鍵遠征軍の元士官。開門都市の住民からなる「衛門族」の族長として魔族会議に加わり、魔王と蒼魔族への対応に当たっている。

勇者

魔王とともに歩む青年。魔界では黒騎士を名乗り、魔王の代理人を務めていた。魔王の暗殺未遂事件を機に、族長たちに正体を明かす。蒼魔族の侵攻を食い止めるべく、蒼魔の刻印王と対峙する。

女騎士

元「勇者の一行」のひとり。正体を知ったうえで魔王に協力している。現在、南部諸王国軍の総司令官として蒼魔軍と戦闘中。

冬寂王

冬の国の若き王。鉄の国や氷の国とともに中央の支配から自立。蒼魔族の侵攻を受け、新たに「南部連合」の設立を決意した。

蒼魔の刻印王

蒼魔族の王。魔王候補の証である刻印を持つ。魔王の座を狙って叛逆を企てるが、失敗。人間界へ侵攻し、白夜の国を制圧した。

火竜大公

竜族の長

紋様の長

人魔族の長

蒼魔上級将軍

蒼魔族の将軍

鬼呼の姫巫女

鬼呼族の長

銀虎公

獣身族の長

巨人伯

巨人族の長

妖精女王

妖精族の長

碧鋼大将

機怪族の長

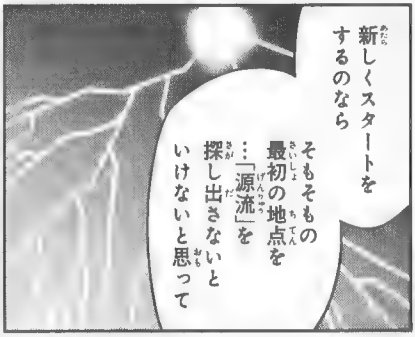
カチャ
イイ
イイ
わぁ…

終わりましたらお声がけください
温かい茶などお淹れしましょう
修道院長のお話などお聞かせ願えれば幸いです
ありがとう

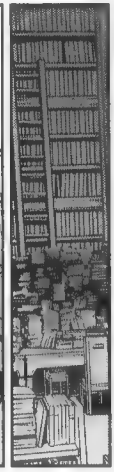
修道院長って
ずいぶん偉い人
なんでしょう？
そんな人の紹介状を
持ってるなんて
すごいのね
以前 お世話に
なったんですよ
それに それは
女騎士さんが
すごいのであって
私がすごい
わけじゃない
ですから
あたしの目的は
「聖骸」だけど
そっちは
なんなのかな？
何を探して
いるの？
おたから
新大陸、たぼうが
神宝いひよね
もわ～
それが
わからないんです

別に
そういうわけでは
ないんですが

うまく言葉に
できないんですが…
古い古い話を
見たいんです
へえ
そういうのが
好きなの？


新しくスタートを
するのなら
そもそもの
最初の地点を
…「源流」を
探し出さないと
いけないと思って

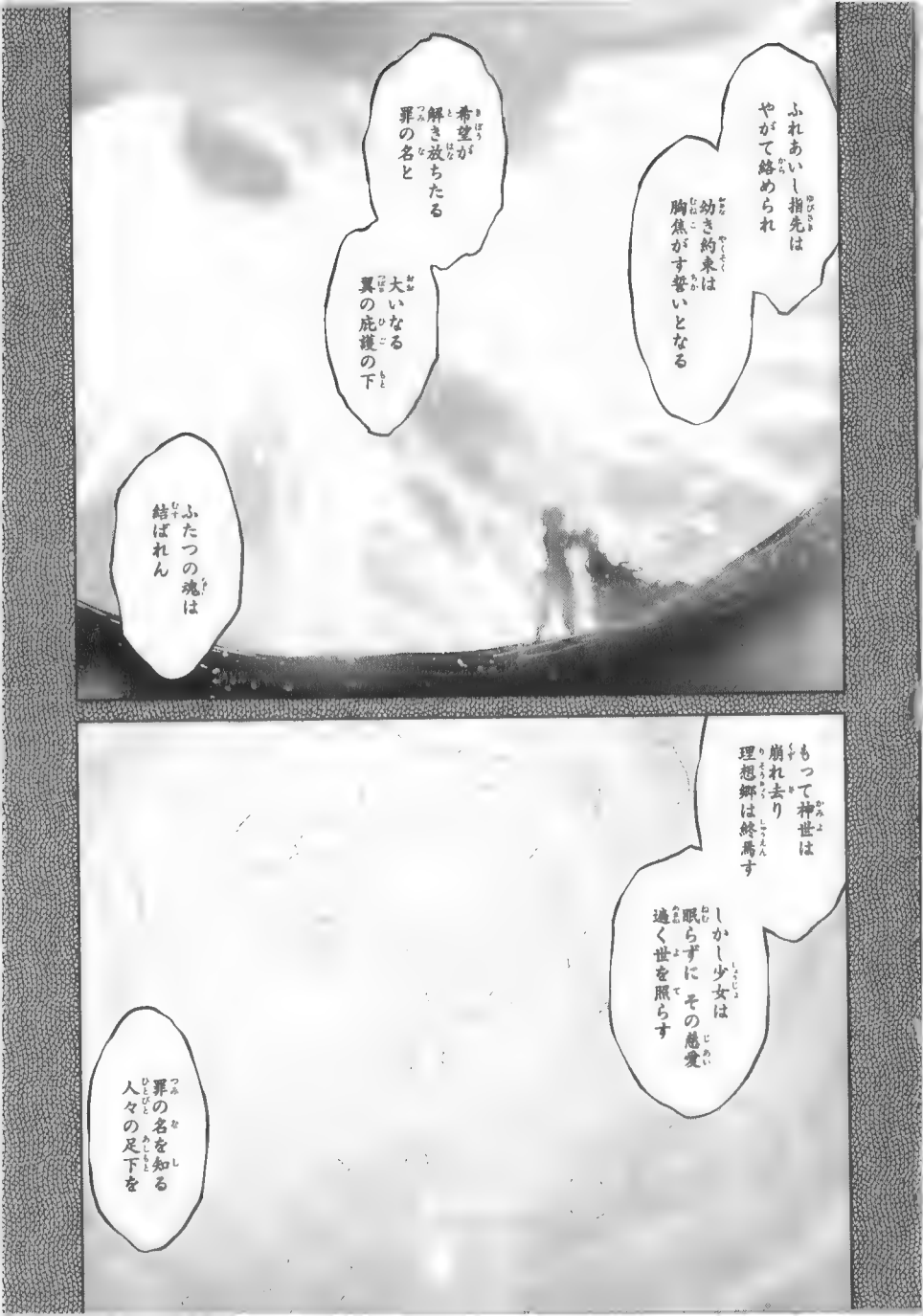
ふぅん
几帳面
なんだね
要領が
悪いんですよ



これなんて
どう？
すごいよ
これは…

とても古い物語の
ようですね
大地…
精霊？

かつて ありし
光あふるる理想郷
其は精霊住みし
失われた大地
大地にありて
輝くは五つの星
森
水
大地
黄金
そして炎
あい和合し
時には乱れ
七の七乗の
七乗倍
歳月を重ねる
炎に生まれし
娘あり
かつてなき
その聡き額に
見えない王冠は輝き
幼き頃からその慈愛
遍く万物を照らす
大地に生まれし
少年あり
異境より訪れし
女と精霊の間に
生まれたる忌み子
大地の
魔峰を黒く汚し
災いをもたらさん


ふれあいし指先は
やがて絡められ
幼き約束は
胸焦がす誓いとなる
希望が
解き放ちたる
罪の名と
大いなる
翼の庇護の下
ふたつの魂は
結ばれん
もって神世は
崩れ去り
理想郷は終焉す
しかし少女は
眠らずに その慈愛
遠く世を照らす
罪の名を知る
人々の足下を

精霊の話…？
初めて目にしますが

これ…
五大家？
え？

精霊の
五大家の話だ
こんなに古いのは
あたしも見たことは
ないけれど

どういうこと
ですか？

まか…
いや
あたしの
故郷では
「大地に住む
人々はすべて
この世界の
最初に生まれた
五大精霊家の
血を引いている」
という言い伝えが
あるんだ

たとえば
あたしの家だと
森の精霊家の
血を引いている
真実かどうかは
わからないよ？
でも
そういうことに
なっているんだよ
本当だと信じている人もいっぱいいるし

……
でも
だからって
なんで こんな
ところに…
聖なる光
教会…
え？

聖光教会
その本拠地
大主教のお膝元
大礼拝堂の
地下図書館には
ここよりも
もっと多くの書籍や
古文書が眠っていると
聞いたことがあります

行ってみましょう
えっ
そこの紹介状も持っているの？
いいえ
入れるの？
普通は入れません

でも大礼拝堂があるのが聖王国の中心部聖王都だということはわかっています
噂を集めるにしろ何かを見つけるにしろ避けて通れる場所ではないと思いますし
私は行きます
詩人さんはどうしますか？

乗りかかった船だ
行くよ
「聖骸」についてもそっちのほうが詳しい情報がわかりそうだし
あたしも興味が出てきた
旅は道連れってね
これからまたよろしく♪
はい
よろしくお願いします

このあたりは
なかなかに貧しい
ところなんです
春には小麦が
収穫できる
はずですが
今年は さほど
出来が悪かった
わけでもないのに
さまざまな要因で
一向に値段が
下がりません

秋まで このままだと
雪のなかで多くの
餓死者が出るかも
しれませんね

…なんだか
ツラいね
ええ
なんで
こんなに
ツラいのかな
…大丈夫？

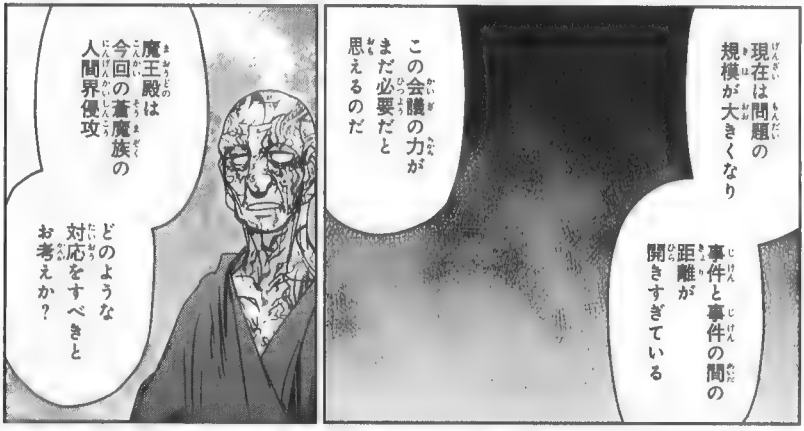
うなされてる？
……
…私だけ助かって…
ごめんなさい…
……

おおっ……
しばらくぶりだ
皆には
世話をかけた

――我が不徳から
長き間 その務めを
離れたことを
申し訳なく
思うとともに
その間の務めを
我に代わって
果たしてくれた
長がたの
深い知恵と行動に
感謝したい
我 四十三代魔王
『紅玉の瞳』は
深くお礼申し上げる

特に 火竜大公には
意見のとりまとめを
していただいた
見事であったと
いうほかない
魔王殿に
そう言われて
我ら一同
胸のわだかまりも
労苦も解けて流れて
いくようですな

では
魔王殿
この会議は
その役目を終え
魔王殿に全権を
お返しする
ということで
よろしいか？
いや それは
保留としよう


現在は問題の
規模が大きくなり
事件と事件の間の
距離が
開きすぎている
この会議の力が
まだ必要だと
思えるのだ
魔王殿は
今回の蒼魔族の
人間界侵攻
どのような
対応をすべきと
お考えか？

衛門の長よ
貴方は 人間界
魔界の事情の
両方に明るかろう
現在の状況について
思うところを
聞かせてくれ

蒼魔族は
長の刻印王をはじめ
軍首脳部
戦闘員すべてが
人間界――
地上に侵攻

南部諸王国のひとつ
白夜の国を一日で
攻略してしまった

魔界で
他氏族全軍を
相手にするのは
難しいので

衛門
鬼呼
蒼魔
人魔
機怪

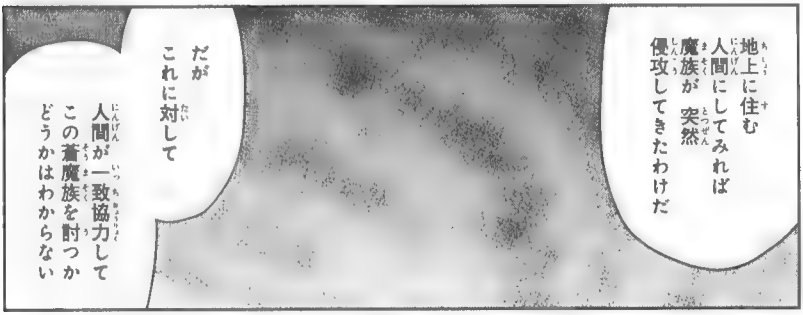
手詰まりになる前に
打って出た
ということだ

蒼魔族の領地には
約十六万人の蒼魔族が
取り残されたようだな

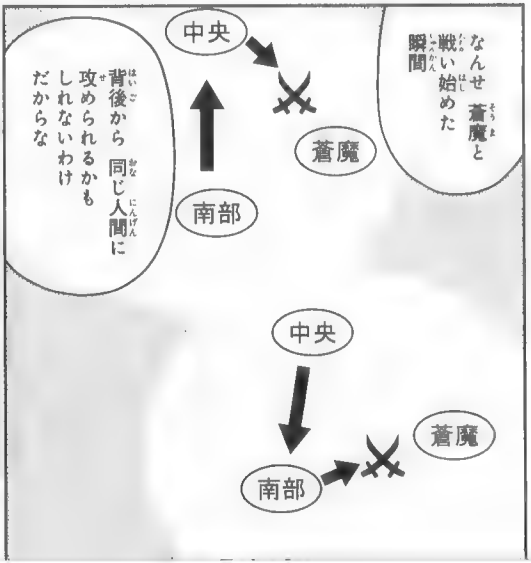
こいつらは
捨てられた

…そういうことに
なるんだろう

地上では
魔界とは
違った形だが
戦争の気配が
あってな
中央
南部
ゲート
南部の王国と
中央が争っている
その隙を狙って
一番落としやすそうな所を
落としたんだろう


地上に住む
人間にしてみれば
魔族が突然
侵攻してきたわけだ
だが
これに対して
人間が一致協力して
この蒼魔族を討つか
どうかはわからない

フム…
なるほど…
ううーむ…


なんせ蒼魔と
戦い始めた
瞬間
中央
蒼魔
南部
背後から同じ人間に
攻められるかも
しれないわけ
だからな
中央
蒼魔
南部

この機に乗じて…
人間界に攻め込む
手もあるか
そんな…
忽郷塔では
人間との戦争について
結論を出さぬまま
中断してしまっていた
今ここで
その結論を
出そうとは
思っていない
だが
今すべきことは
やはり 人間との
戦争ではない
ように思う
いかがか
銀虎公
我が一族は
戦闘の一族だ
人間と戦うのならば
ためらいはない

だが 今の状況は
気に食わん！
蒼魔族に闘されて
人間と戦うよう
ではないか
我が獣牙の一族は
戦う順番としては
蒼魔が先だ！
…そう考える

ですが
そうなると
人間界に
攻め込むことに
余計に事態を
悪化させるのでは
ないか？
我らが魔界の
裏切り者が 人間世界で
暴れているのだ！
それを叩くに
なんの遠慮を
必要とする!?

魔王殿は
どう考える
――事態は
刻一刻と悪化を
続けている
手をこまねいていては
より悪い結果を
呼び込むかもしれん
銀虎公の案に
かけてみよう

長がたに
異存なくば
魔王軍 初の
遠征とする
おおお
遠征としては
あまりにも
遠い地ゆえ
大軍を率いて
行くわけにも
ゆかぬ
銀虎公
は！
ガウッ
精鋭八〇〇〇を
率いて 我が傍らで
右軍将軍として
我が意に従い
指揮を行え！
ははぁ！
ヤロー
皆将殿の
人間の世界が
舞台となる
左軍将軍となり
その知謀を
貸してくれ！
わかった
まかしとけや

碧鋼大将
旧蒼魔族領地に入り
その金山 鉱山
工房を封鎖し
凍結せよ
また その領民を
掌握し
安堵せしめよ
機怪一族が
その異形ゆえ
迫害されてきた
歴史は知っている

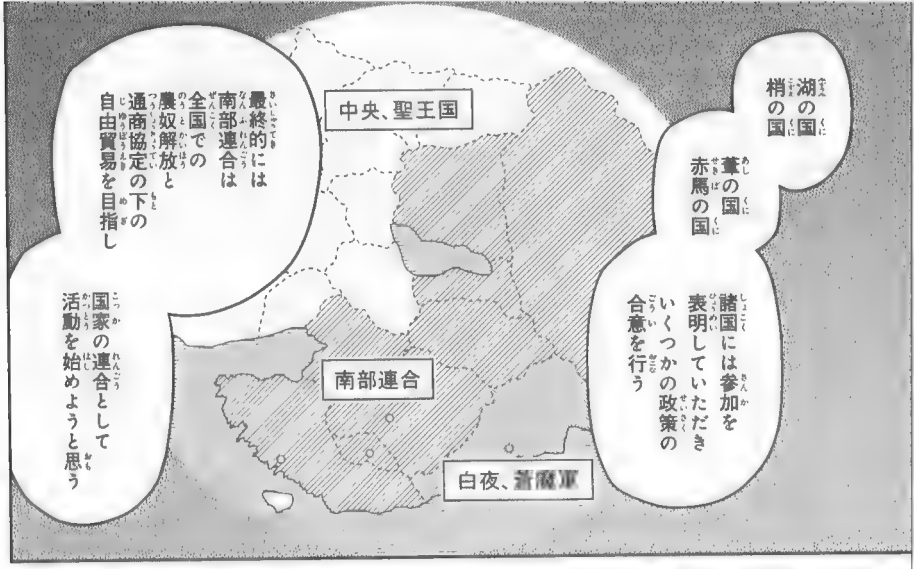
長と軍に見捨てられた
蒼魔族を救えるのは
同じ悲しみを知る
長の一族だけだ
頼む
ガガ…
承りました
必ずや

巨人伯
鬼呼の姫巫女
紋様の長
長がたの
下した決断を
私は重んじたい
世界が戦になろうと
平和になろうと
街道と開墾は必ずや
その力になる
建設に総力を
挙げてくれ
ハッ

火竜大公
わかっております
魔王殿の留守は我らにお任せを
あ
あの
なにか
できる
ことは…
我が一族は？
妖精の女王よ
はい！
あなたが
今回の遠征の
要だ
…え？
ゴゴゴ
ヒヒィ
ドォォォ
ゴゴゴ

…そんなわけで
魔族との交戦は
守備部隊により
峠道において
回避された
峠道自体を
封鎖したのか…
今回魔界から突如
侵攻してきた魔族は
蒼魔族と呼ばれる
魔界でも
随一の好戦的な
部族だ
そして それを
率いているのは
刻印王と呼ばれる
若い王らしい
その刻印王は
前王を抹殺の上
軍を掌握し
その精鋭を率いて
人間界へ
なだれ込んできた
その数
二万と五千

対する我らの軍は
三国合わせても
一万がやっと
このままでは
我らが三か国
存亡の危機だ
氷雪の女王
諸国の委任状や
とりまとめの
状況は？
それは
滞りなく
進めて…
まさか!?
このタイミング
しか あるまい
三国通商同盟は
その名を
「南部連合」と
改める
!!


湖の国
梢の国
葦の国
赤馬の国
諸国には参加を表明していただき
いくつかの政策の合意を行う
中央、聖王国
南部連合
白夜、蒼薇軍
最終的には
南部連合は
全国での
農奴解放と
通商協定の下の
自由貿易を目指し
国家の連合として
活動を始めようと思う

それで
援軍をアテに
できるのか？
長期戦ともなれば
援軍以上に
物資の補給が
ありがたくも
なるだろう
また
義勇兵の募集も
期待できる

それに天然痘の
予防体制
種痘は この春に
やっと第一段階の
実用化を迎えた
今後は
この技術を伝え
湖畔修道会を中心に
連合諸国…
ひいては
この大陸すべてに
広めてゆかねば
ならない

ここで連合が潰え去ることだけは
我ら三か国ならず人間世界にとってあってはならぬことだ
総司令には…
私が出る
頼む
戦の帰趨はどうなると見る？
数も質も敵が上だ
勝つのは難しく最善であっても苦戦は避けられぬだろう

一刻も早く
現地の地形の
把握が必要だ
私は戦場に
向かおう
…!
…中央が味方に
なることは
ないだろうが
せめて
動かなければ
いいのだが…

光の精霊の尊き
御名の下に集いし
汝ら光の子よ
選ばれし
戦士たちよ！
我らが旅立ちの
時が来た！
今こそ語ろう
「聖骸」の秘密を！
それは
我らが救い主
光の精霊の遺骸
世にふたつと
なき至宝！

遥かな古の昔
魔族は その宝を
我らが選ばれし
民より奪い去り
魔界へと隠したのだ！

南部の諸王たちは
その輝きに魅せられ
我ら人間と
精霊の慈悲を
裏切ったのである

中央諸国の光の
教徒たちよ！
南方の同胞の
救援に進め！

彼らは闇に
とらわれた
囚人なのである

我ら光の戦士の
雄々しき腕による
救済こそが
今 必要なのだ！

我と共に旅立つ
光の教徒たちよ！
今こそ
大義のために
立ち上がれ！

我らは
「開門都市」と
「聖なる鍵」を
手に入れ

我らが奪われし
永遠の宝
「聖骸」を奪還
せねばならない

光の導きの下に
今こそ出陣の時！
精霊の旗の下！
いざ南へ！
オオオオオオオオ
精霊は これを
欲し給う！
精霊は これを
欲し給う！

精霊は これを
欲し給う！
パチパチ
お見事な
演説でしたわ
光栄ですな
猊下は？

猊下も御自ら
近く出立される
ご予定です
我ら百合騎士団が
その身をお守り
いたしますわ
南部の邪魔者どもの
始末は任せます
百合騎士団
隊長
終
第三十五話
古い物語

第三十四回

十字軍と聖地の奪還

**聖地奪還を大義とした十字軍。
しかし、時代が進むにつれて
次第に宗教的な動機ではなく、
世俗的な動機が強くなった。**

参加者を鼓舞するうえで演説は効果的。
歴史上の十字軍もまた、教皇の演説から始まった。

歴史における十字軍の姿

作中に登場する「聖鍵遠征軍」は、中央聖光教会と聖王国が中心となって行なう軍事遠征だ。兵の動員は「光の精霊様」の名のもとに行われており、宗教色が非常に強い。

そして、歴史上で聖鍵遠征軍に似たものといえば、聖地エルサレムの奪還を目的とした十字軍が有名だ。

最初に十字軍が行われたのは、1096年のこと。当時、現在のトルコ周辺に興ったイスラム王朝セルジューク朝が勢力を拡大、圧迫された東ローマ帝国皇帝が、ローマ教皇に支援を求めたことがきっかけだった。

要請を受けたローマ教皇は、教会会議を招集。集まったフランスの騎士たちに、東ローマ帝国への救援と異教徒に対する聖戦の必要性を説いた。さらに、聖地エルサレムの奪還を掲げ、従軍した者は罪が許されるとして十字軍への参加を呼びかけたのだ。

当時、力を持て余し気味だった諸侯や騎士たちは、教皇の呼びかけに応じて集結。道中の都市を制圧しながら進軍し、1099年にエルサレムを攻略した。

このように、当初の十字軍は聖地の奪還を大義名分とした宗教色が強い軍事行動だった。しかし、発端は領土の防衛という世俗的な目的であり、また参加した諸侯のなかには途中で遠征軍から離脱し、「十字軍国家」と総称される国を打ち立てた者もいた。

また、最初の十字軍の参加者によって、ヨーロッパに東方の品がもたらされ、のちの十字軍に参加した者のなかには、宗教的な動機ではなく、こうした品々の獲得、つまり物欲から参加する者も多かったのである。

それから約90年後、エルサレムは新たに興ったアイユーブ朝によって奪い返された。ヨーロッパでは、それから数度に渡って十字軍が起こったが、再度の奪還はできなかった。

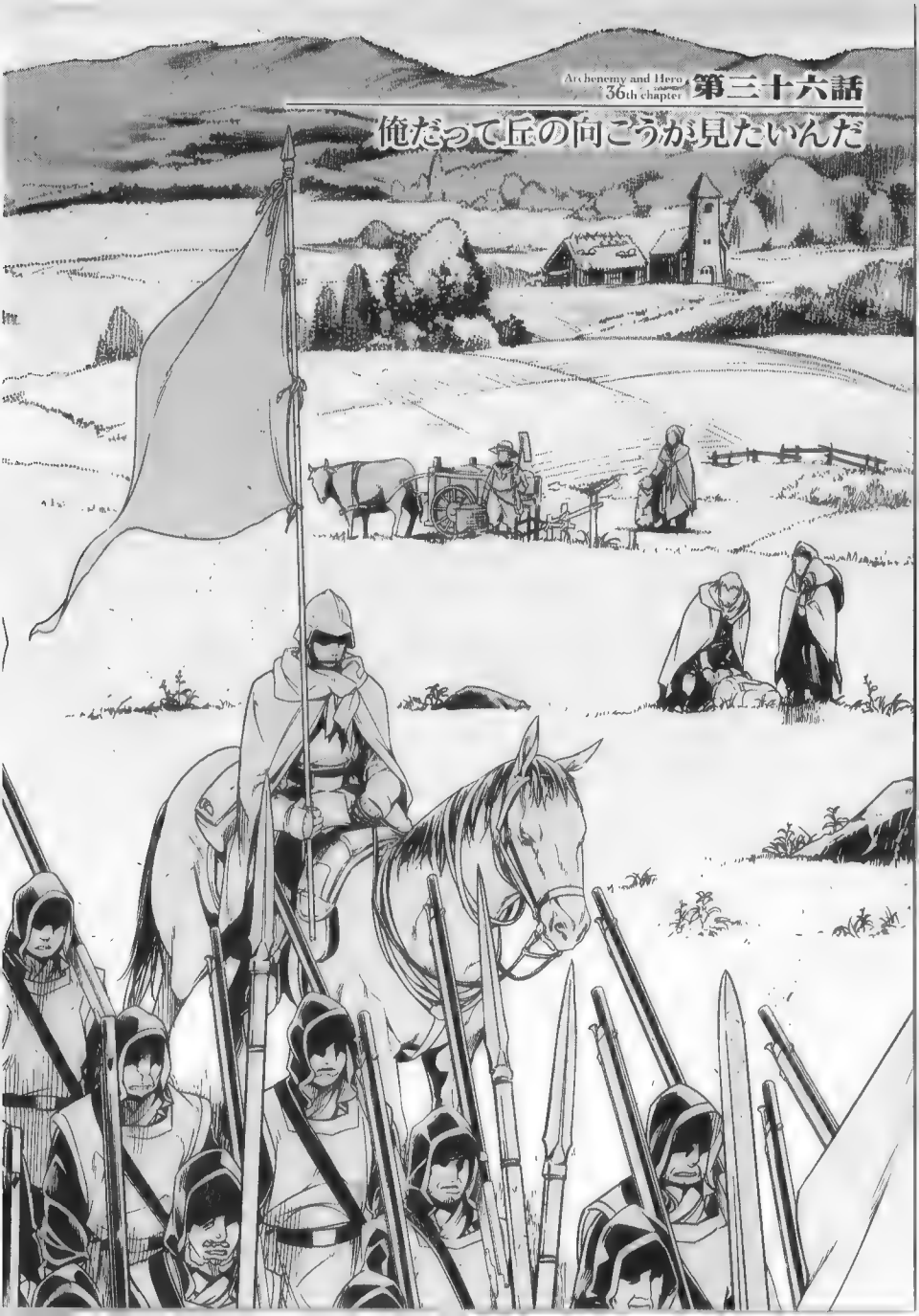
小規模な十字軍も幾度か起こったが、その目的はカトリック教会に対立する勢力への討伐というものが多かった。ついには同じキリスト教徒同士の争いに利用されるようになり、十字軍を定期的に見る者が増えたことから、十字軍は行われなくなった。

王弟一派の言葉にある「聖なる鍵」や「聖骸」とは、いったいどのようなものなのだろうか

祈り

白夜の国
王都
どうして？
おかあさん
どうして？
ごめんね
目立たないためには
こうするしかないの
ギャ
ギャ
ギャ
ぎゃあっ
やめ…
抵抗するんじゃねえ
ニンゲンのくせに
ギャ
きさまら
敗北者は
勝者に従え
せいれいさま…
光のせいれいさま
どうか
たすけてください
おねがいします

…父ちゃん
地面が
動いてる
こりゃあ…
なんて数の
軍隊だ
精霊はこれを
欲し給う
精霊はこれを
欲し給う
精霊はこれを
欲し給う
大主教様が
第三次聖霊遠征軍を
召集なさったのです
神父様
彼らは皆
聖戦に向かう
戦士なのですよ
おお…
世界の終わり
みたい…
まおゆう
魔王勇者
第二十六話


Archenemy and Hero
36th chapter
第三十六話
俺だって丘の向こうが見たいんだ

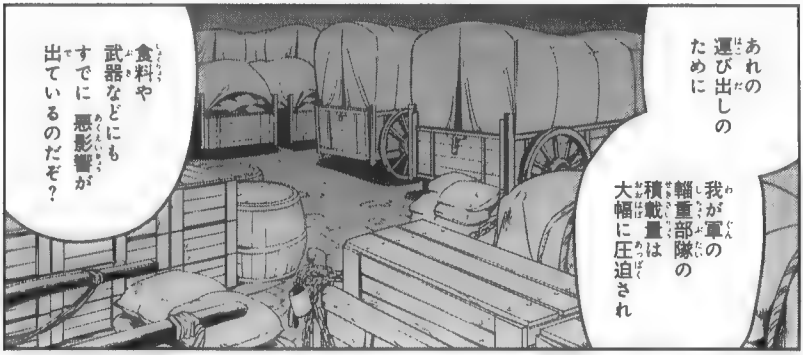
白夜の国
首都

このたびは
御戦勝
おめでとう
ございます
我らの実力ならば
容易いこと…と
言いたいところだが
聖王国が流してくれた
情報も助けになった

…ところで
刻印王は？
蒼魔族の若き王に
一言 ご挨拶を
と思ったのですが
王は 力を
蓄えるために——
ドン…

——瞑想に入った

ときに
依頼の件は…
ああ
依頼されたとおり
最大限の量を
国元より
運び出してきた

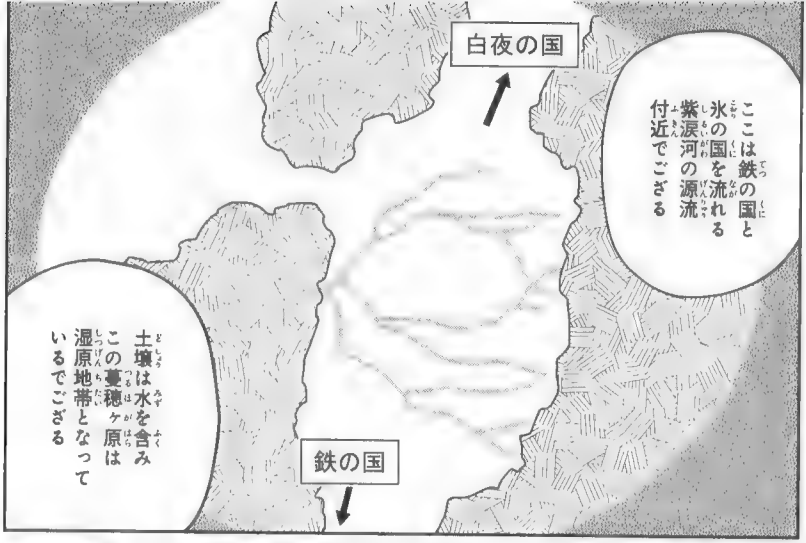

あれの
運び出しの
ために
我が軍の
輜重部隊の
積載量は
大幅に圧迫され
食料や
武器などにも
すでに 悪影響が
出ているのだぞ？

ずいぶん 貴重な
物のようだな？
硝石とは
いくつかの
産業で 入り用
でしてな

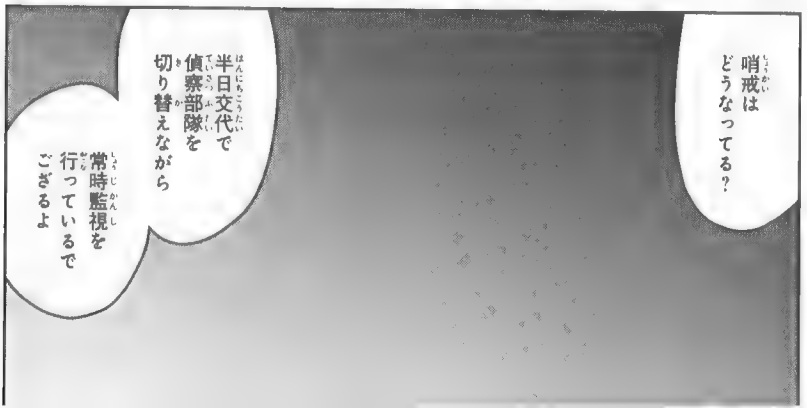
どれくらいの量を用意されているのですか？
馬車にして九〇〇台といったところだ
…ではそれらすべてを三倍の量の食料および替えの武具四〇〇〇人分でいかがですか？
五倍の食料及びそのままの数の武具と交換して貰おう
…わかりました
引き渡す硝石は半分だ
少なくとも我らが隣国を落とすまではな
補給食料はいつ用意できる？
半分であればさほど時を置かずに用意できるでしょう

もう 次の戦の準備ですか？
白夜の国が思いのほか楽に攻略できたのでな
楽すぎて興がない
次の国は歯ごたえがあればよいのだが
鉄の国ですか
南部三か国のなかではもっとも兵の充実した国です
噛み応えはあるでしょう
安心なされてよろしいかと
そうだとよいが…
ん？
どうなされた？
いや なんでもないようだ

白夜の国と
鉄の国との間で
両軍が衝突する
場所となると…
蔓穂ヶ原
ですかね
蔓穂とは
なんだ？
草花です
白から濃い紫の
花が咲く…
紫か
我ら蒼魔の
吉兆の色だ
それで
お前は ここが
戦場になると
読んだのか？
はい
付近では
大規模な軍を
運用できる土地は
他にはござらん


白夜の国
ここは鉄の国と
氷の国を流れる
紫涙河の源流
付近でござる
鉄の国
土壌は水を含み
この蔓穂ケ原は
湿原地帯となって
いるでござる

水量の豊かな
この地は
いずれ干拓や
灌漑が進めば
豊かな
農地となるかも
しれないで
ござるが
現在のところは
水はけの
悪い草原
湿地帯・泥炭地の
混合地形でござる


哨戒は
どうなってる？
半日交代で
偵察部隊を
切り替えながら
常時監視を
行っているで
ござるよ

さぁって
本番は
ここからだな
こちらは合わせて
五五〇〇
敵は最大
二五〇〇〇の
蒼魔族

蒼魔軍は
武装がよくて
統制も取れ
訓練も
行き届いている
様子
つまり
敵の司令官は
バカでもなければ
油断も慢心も
していないという
ことでござる

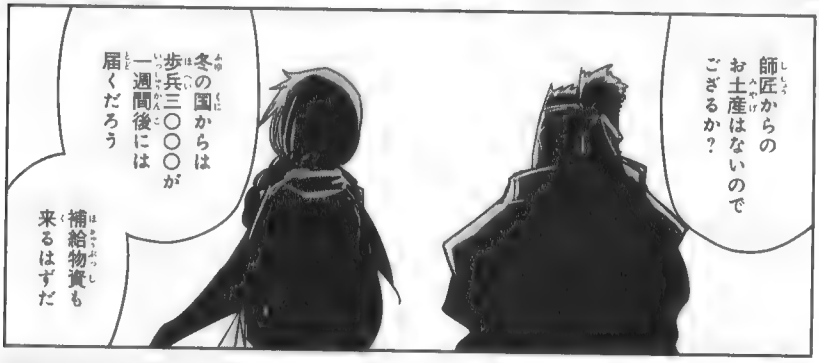
そして四倍の
数がいることから
考え合わせると
通常の戦闘を
するかぎり
拙者たちの
運命は
敗北以外には
ないという
ことでござる
同感だ

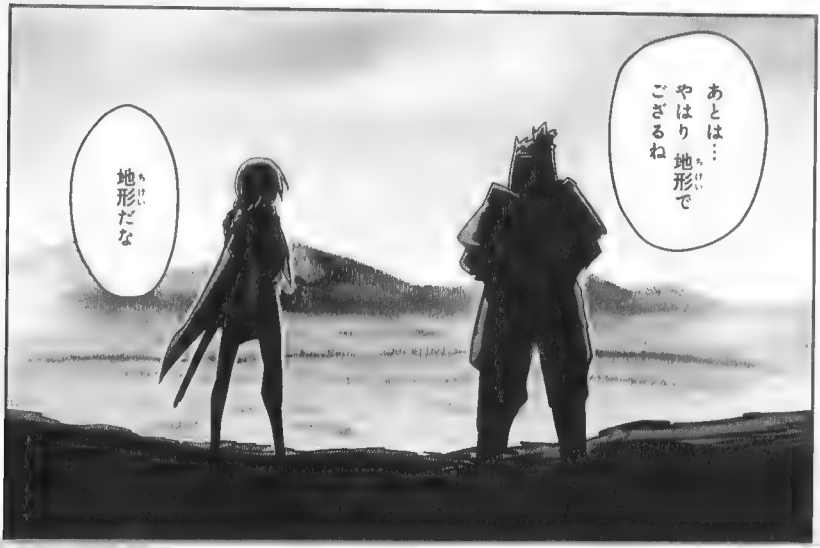
ではどのように機略を用いるかということでござるが
その前に確認したいことは
この戦争の最終的な目標でござる
目標が与えられないかぎり
戦術は構築できないでござる
よく覚えてるな
戦術授業だけは真面目に受けたでござるよ
お前も護民卿になったんだろう？
目標設定もしてみるべきだな
民を護ることでござる
「どこ」の？
もちろん白夜の国を含めて

では目標はただひとつ
蒼魔族を打ち破り白夜の国も解放すべきだ
ま
待ってくださいよ
今私たちは自分たちが生きるか死ぬか
国が滅びるか滅びないかの瀬戸際なんですよ!?
そんな他国の民のことまで気にする余裕は…
「完全」を求める者にこそ
それでやっと「半分」が与えられるでござるよ
…
さぁて
ずいぶんホネのある課題になったな
そうでござるね

まずは
数の差を埋めるで
ござるよ
おお
そっちから
いくや

拙者のほうでは
開拓兵に声を
かけるでござる
工兵と
してならば
期待できるで
ござる


師匠からの
お土産はないので
ござるか？
冬の国からは
歩兵三〇〇〇が
一週間後には
届くだろう
補給物資も
来るはずだ


あとは…
やはり 地形で
ござるね
地形だな

とは言え
さっき聞いたが
敵もバカじゃない
やすやすと
不利な地形での
決戦に応じるとは
思えないな
で
ござるな
敵をこちらの
有利な地形に
誘導したい
むしろ敵が
自ら望んで
食いつくような…
エサが必要で
ござろうね
エサ
か

ん？
なんだ？
……！

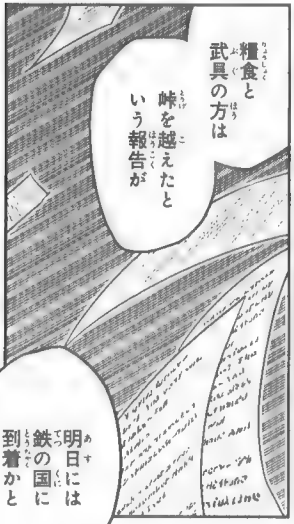
師匠にみとれていたのでござる
は？
キモイ悪いな
なんだいきなり

いやいや
師匠の美しさは皆が認めるところ！
まさに戦場に咲いた華でござる
なんなんだ…

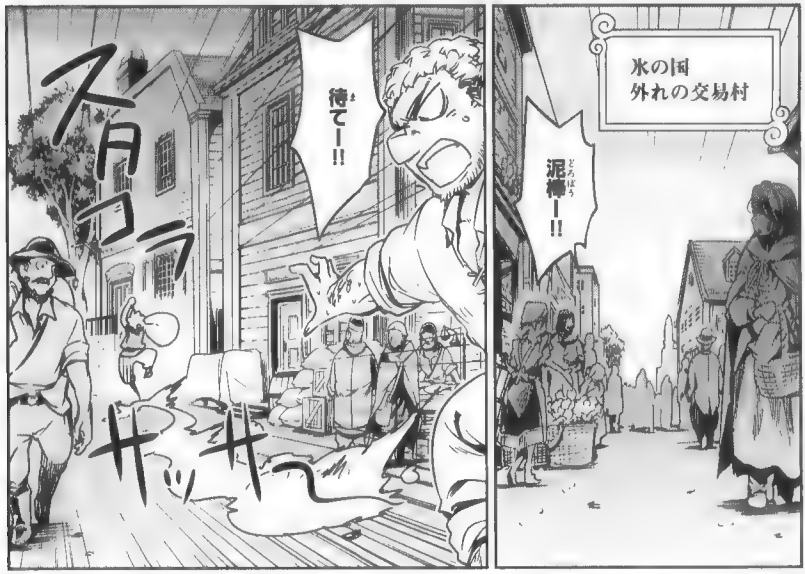
蒼魔族が
ヨダレを垂らす
おいしいエサは
女騎士
将軍をおいて
他にはいないで
ござるよ！

冬の国

援軍の歩兵
三〇〇〇
間もなく
出陣準備が
整います
よし
準備が
整い次第
すぐ出陣


糧食と
武具の方は
峠を越えたと
いう報告が
明日には
鉄の国に
到着かと

ところであの子は
大丈夫でしょうかぁ
うん…
心配は心配だけど
あの男は
兄弟弟子の中でも
一番 女性に優しいやつだ
悪いようには
しないだろうさ


氷の国
外れの交易村
泥棒ー!!
待てー!!
スタコラ
サッサッ

待てといわれて
待つバカが
いるかよ
AAAA
ス・・・
ヘベー
ドシャアアア

何を
しやがるっ
泥棒は
いけない
ことだよ？
エレガント
じゃないねぇ

おお
よく止めてくれた
ヒィ
ヒッ
ビリ
二のザキ
ふえぇヤバだ
待った！
この少年の処遇については任せていただけませんか？
このあたりに詳しそうな道案内が ひとり欲しかったんです
え？

ぜぇ
ぜぇ

ホラ
サクサク歩く
遅いよぉ
お前らの荷物も俺が持ってるからだろうが！

私女の子だもん
キャッ
キャッ
ひ弱な貴族ですし

本当にこっちなんですか？
ああ
だけどなんであんな…

たぶん
あの廃墟に…
じゃあ
俺は ここで
いいだろう？
俺は行きたく
ねぇよ
あの連中は
ヤバいんだって
ただの野盗と
一緒にしちゃ
まずいんだよ！
だから わざわざ
来たんじゃ
ないですか
それに…
とっくに
見つかってますよ

…さて

お前らは
何をしに来た？
返答次第じゃ
生きては
帰さねぇぞ

このあたりに
屈強な傭兵団崩れが
いるって聞いてね
冬の国から
訪ねて来たんだ
会えて
ラッキーだったよ

ほう…

…で
どっち
なんだい？

「どこかから
奪ってほしい」のか

「冬の国をカンペンして
ほしい」のか

俺たちは
野盗だからよ

金をくれた
方につくぜ？

まあ
額次第だがな

坊ちゃんたちを
売ったり
身代金を取ったり
した方が割がいいと

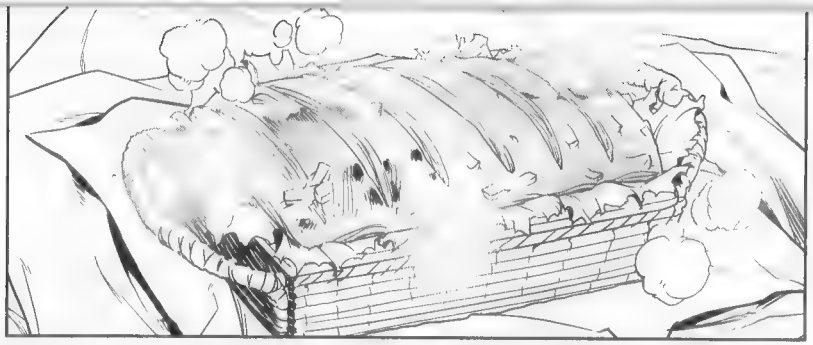
俺たちが
思わないような
額にするのが
身のためだぜ

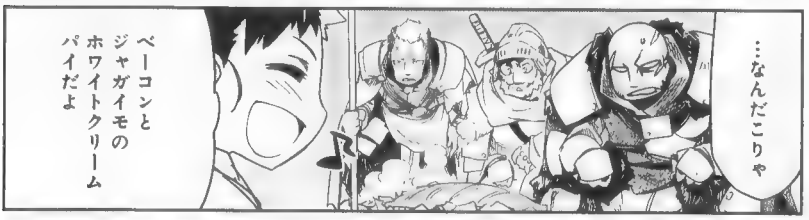
白夜の国ってあるだろう？
そこの首都が魔族に落とされていてね
依頼としてはそこの首都を救ってほしいんだ
……
はああ!?
何を言ってるんだお前
ふざけたこと言ってんじゃねえぞ
貴族の兄ちゃんよ
生きているうちに言いたいことはそれだけか？

そもそも
白夜の国は
滅びたよ
王も死んだし
政府だって
残っちゃいない
あそこは「かつて白夜と
いわれた土地」って
だけだ
あそこに
いるのは
ただひたすら
飢えて酷使される
農奴以下の奴隷と
なった国民たち
——それだけだ
だから
あそこでは
大変需要が
あるんだよ
そう
ヒーローって
やつのね

どうだい
ここは ひとつ 解放軍とやらに なってみる気は ないかい？
お前…
そんな言葉を 正気で言って いるのか!?
ああ
いたって 正気さ
どうにも 我が学院は 正気になれば 正気になるほど
周囲から見て 狂気に見えるという 忌まわしい伝統が あるようなのだよ
今 あそこを 支配している 魔族は近々
隣国である 鉄の国に攻め込む はずなんだよ
ほとんど全軍を 率いて出発すると 僕の兄弟弟子は 見ている
すると 白夜の国には ほとんど兵力は 残らないはずだ

ただの野盗に
国が救えるとでも？
できる
わけがねぇ
よく手入れされた
武具と馬
息の合った
組織行動
君たちは
ただの野盗じゃない
いずれ来る
機を待つ傭兵集団だ
報酬は
なんだ？
？
パラ




…なんだこりゃ
ベーコンと
ジャガイモの
ホワイトクリーム
パイだよ

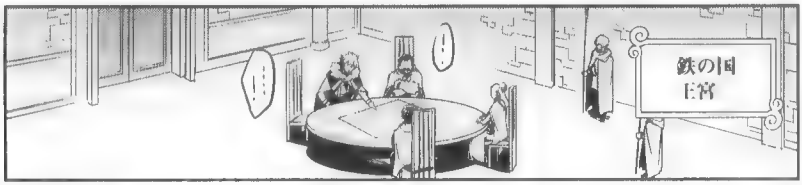
おぉっ
うめぇ
…うめぇな

白夜の国を
救うと
こういうのが
ずっと食える
ようになる
は？

自分たちを
地獄から救って
くれた英雄だ
民は感謝するぞ
「ありがとう」って
言うぞ
そういうふうに
ならないか？

もう一個
もらっても
いいかな
こいつは
うめぇや
なんだか
堪えるほどに
――うめぇなぁ
――いいだろう！
こんなに
うめぇ前金
受けとったら
働くっきゃ
ねえだろ！
おい
お前ら！
付近の
主だった連中に
渡りをつけろ！
俺たちの戦が
始まるぞ
おお

どうせ どっかで
のたれ死ぬのが
傭兵の運命だ
死ぬ前に一回
その「ありがとう」
とかいうやつを
拝んでやろうじゃ
ねぇか！


鉄の国
王宮

ところで…
紹介したい
客人を待たせて
いるんだが
おお
ぜひ
通してくれ
本当か!?
ありがとう!!
勇者殿の
招かれた客人なら
いつでも大歓迎だ

はじめまして
妖精女王と
申します
こちらは
羽妖精
ハジメマシテ

魔界において
魔族大会議
忽鄰塔を構成する
八つの氏族の
うちのひとつ
森に住む者
夜明けと黄昏の
はかなき者たち
妖精族の
長だ

……ま
魔族
…だと!?
ガバッ
ガバガバ…

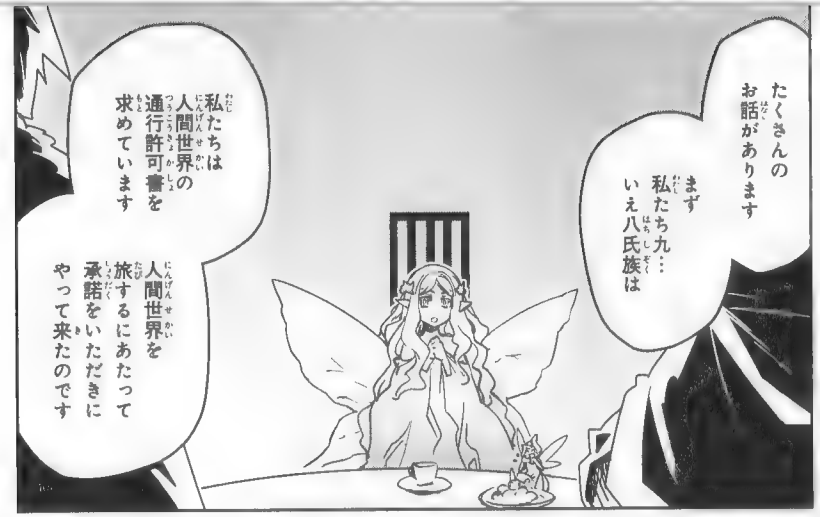
彼女は忽鄰塔
つまり魔界の
最高会議だな
そこの代表者
特使として
きている
会議だけではなく
この使者は魔王の
意志でもある
魔王…!?
魔族の
代表だと…?
ガタタ
チャキ…
衛兵!
衛兵!!
あー
大丈夫だから
勇者殿
これはいったい
どういう冗談なのだ!?
勇者殿

…冗談ではないのだな？
うん
ばっちり本気
妖精女王よ
よくぞ遠いところはるばるいらっしゃった
何を言うのだ
魔族なんだぞ!?

彼女は魔界での身分を人間に照らせば王族にあたる
たとえ敵対する国家であっても王族には王族の扱いがある
それに
あのひ弱そうな侍女以外誰ひとりとして連れていない
彼女は我らの信を得るためにわざわざ丸腰で来たのだ

しかし…
それに勇者が連れて来たのだ
彼を信ぜよ
…ふん
それは確かにそうだな

…鉄腕王ともあろう者が女に怯えて話も聞けないとあっては
末代までの笑いものだ
聞こう
ありがとうございます


たくさんの
お話があります
まず
私たち九…
いえ八氏族は
私たちは
人間世界の
通行許可書を
求めています
人間世界を
旅するにあたって
承諾をいただきに
やって来たのです

また
人間の領土に
攻め込もうと
いうのか？
いや
まぁ
最初っから
話さなきゃ
わからないだろう

そもそも
なにゆえ勇者が
魔族を伴って
現れたのだ？
勇者は
魔族と通じて
いるのか？
そのほうが
正しいと思えば
誰とでも話すさ

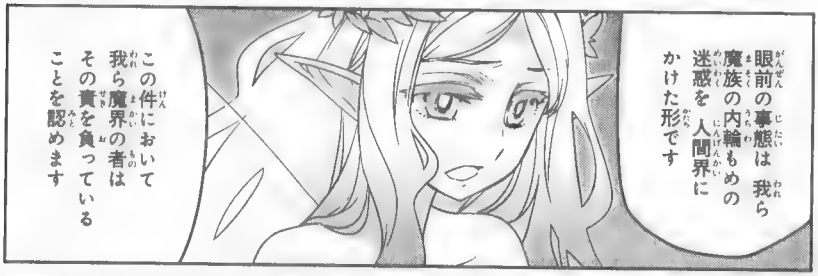
ことの
はじまりは
…そうだな
今回のことの
はじまりは
魔王の長きにわたる
ケガの療養
そして
忽鄰塔だった

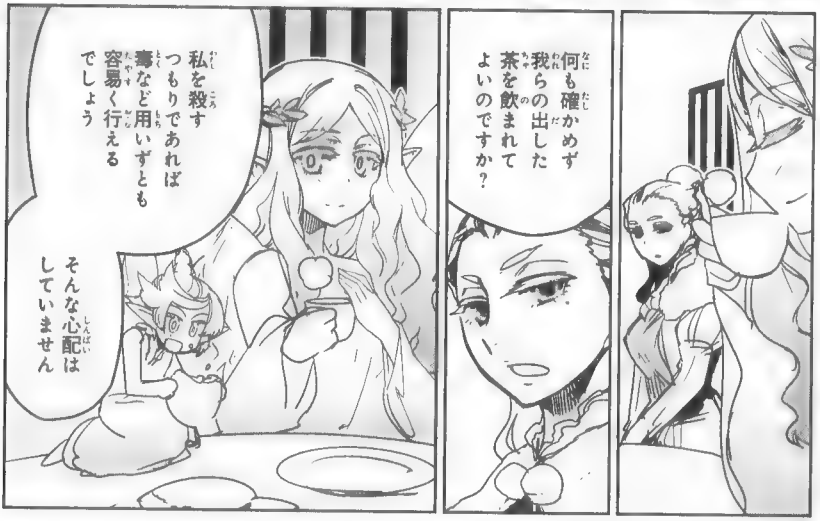
はじめて聞く話が多く
すぐに信じるわけにはいきませんね
そうだな
無理もない
そもそも我らが魔族と対話すること自体がはじめてなのだ

この三年間の経緯や魔族での勢力関係などは
冬の国の調査隊が送ってきた報告とどれも符合する
その部分までは信じてもよかろう

そして魔界を追われた蒼魔族が
地上の白夜国を襲った…

けっきょくは
とばっちりって
ことか
気に食わん
鋼の腕を持つ
戦士殿のおっしゃる
とおりです


眼前の事態は 我ら
魔族の内輪もめの
迷惑を 人間界に
かけた形です
この件において
我ら魔界の者は
その責を負っている
ことを認めます


何も確かめず
我らの出した
茶を飲まれて
よいのですか？
私を殺す
つもりであれば
毒など用いずとも
容易く行える
でしょう
そんな心配は
していません

我らは
魔界の碧太陽を
こよなく愛し
その碧太陽が
もたらす恵みを
愛します
これが
地上のお茶
ですか
しかし
このお茶は
地上の太陽の
恵み
その力強さを
感じます
これもまた
素晴らしい
ものです

私は忽鄰塔

新生八氏族および
魔王の意志の
代弁者として
こちらに伺いました

私たちの
考えを述べます

まず
第一に 我らは
蒼魔族を討ちとる
べきだと考えます

蒼魔族の
暴走を許したのは
私たちの責任

魔界の軍を
蒼魔族の元へと
向ける許可を
いただきたい

さらには
私たちは
三国通商同盟との
停戦を求めます

本当は人間世界
すべてとの
停戦を求めて
いるのですが

一部で
あっても

ひとつずつ
解決するのが
大事だと考えて
います

魔族の軍を
侵入させるとして
数は？
約一万です
いまの話が
すべて嘘で
蒼魔族に
増援を送り
人間世界への
侵略を進める
謀略ではないと
いう証拠は？
その可能性は
否定できませんね
見ろ
話にならぬ
今日まで
殺しあっていた敵を
急に信じろというのが
そもそも無理なのだ

大空洞から進み
この国の国境付近に
我が妖精族の乙女
千人を待たせております
乙女？
千人？
魔界の軍が撤収するまで
それら乙女と共に
私がこの城で人質になるということで
信じてはいただけないでしょうか？
！

勇者殿
勇者殿は
どういう
おつもりで
我らに
この魔族を
お引き合わせに
なられたのか？
こっちには
つもりも思惑も
あるけれど
いまはそれよりも
損得の話をすべき
かと思うぜ？
…むう
そうですな
勇者殿は何も
南部諸王国の
臣下ではない
あー
誤解して
そうだから
いっておく

俺は人間世界の守護者でもない
俺は勇者――
「救いを求める世界すべてを救う者」だ
もしその必要があるのならば
どこの誰でも誰が何をいおうと
助けに行く

人間の敵にまわるおつもりか
敵味方なんて話はしていない

我らが望めば我らも救ってくださると？
この力の及ぶかぎり

…救い？
救い
そうだな…

そう
妖精女王と
三か国の王が
語り合う
この会合こそが
いま現在
世界の救いだと
俺は信じる
ド
こ
刻印王様…
お目覚めで…？
ギャアアア

ゴゴゴ
ズズズ

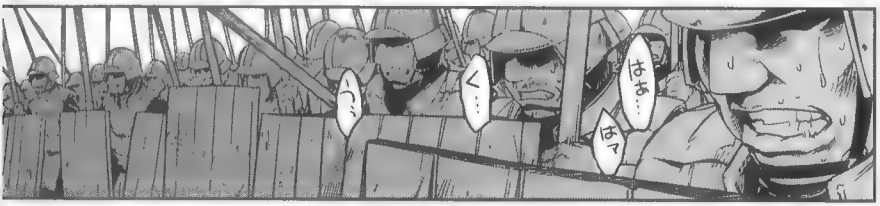
瞑想を
解かれたか
刻印王
ゴゴ

ゴゴ

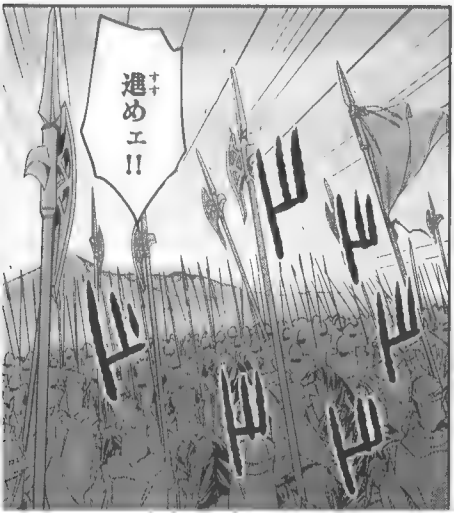
ゴゴ
ゴゴ

我らも
ゆくぞ
準備は
よいな？
ハッ

出陣！
出陣だ！


はぁ…
はマ
く…
っ…

ほら
さっさと
進め
うぅ…


進めェ!!

動きました！
蒼魔軍
およそ二万！
こちらに向けて
進軍中！
ざわっ
ガガガ
よし
手はず通り
この地で迎え撃つ
各自
配置につけ！
おおお
！
ゴゴゴ
なぜ…？
地震…？
おお…？

これは
まさか…
ゴ
そうだ
ゴ
ゴ
…だが
あいつの相手は
我々じゃない
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ

俺は
魔界の中心に
突っ込んでいった
暗殺者だったよ
戦うことの
意味も考えず
平和の意味さえ
考えずに
ただ
ガムシャラに
でも その実
無責任に
ただ 暴力を
振るっていた

でもな
もう
そういうのは
やめた
そういうので
新しい世界へ
行けるだなんて
夢はもう見ない
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
!!
王たちよ
どうか正しい道とは
なにか考えるのを
やめないでくれ
ゴゴゴ
俺は
俺の役目を
果たしに行く
…俺は
俺だって
丘の向こうが
見たいんだ

ゴゴゴ
ヒュ
ウウウ
ゴゴゴゴゴ

魔界がダメだったから
人間界に逃げてきたか？
「候補止まり」くん

我こそが
魔王だ
貴様も勇者なら
我の力がわかる
だろう
あの女が
拒否した
魔王の力は
今我と
ともにある

終 第三十六話 俺だって丘の向こうが見たいんだ

第三十五回

ヨーロッパの傭兵

戦うことを職業とする傭兵は15世紀から18世紀にかけてヨーロッパ各地の戦場における主力を担った存在だった。

傭兵の報酬のなかには、略奪や誘拐した貴人の身代金などが含まれる場合もあった。

古くからあった傭兵という職業

傭兵とは、金銭などの利益と引き換えに雇用され、自身と直接の利害関係がない戦争に参加する者たちだ。その歴史は古く、中近東では紀元前の古代オリエント時代には、すでに存在していたという。

古い時代のヨーロッパの傭兵としては、紀元前3世紀のポエニ戦争で共和政ローマと戦った、カルタゴ軍が有名だ。カルタゴは海洋貿易によって繁栄した都市国家。人々は商人であり、戦いは不得手だった。彼らは貿易で得た潤沢な資金で傭兵を雇い、国防を担わせていた。このため、ローマとの戦争で矢面に立ったのは、カルタゴの市民ではなく傭兵たちだった。

時代が下って中世になると、戦争の主力は封建制下の騎士が担うようになる。当時の戦争で王が率いる軍は、臣従している諸侯の兵を中心に構成され、王が直接指揮下に置いている兵は少なかった。このため、各国の王は戦争が起こるたびに傭兵を雇い、足りない兵力を補っていた。王政ではないものの、貿易の中心地として栄えたヴェネツィアやジェノヴァといったイタリアの各共和国では、とくに傭兵の雇用が盛んだった。これらの国には市民による軍隊も存在したが、富を狙う諸外国から国を防衛するため、傭兵によって兵力を増強していたのである。

15世紀に入って王権が強くなってくると、財政に余裕がある国では直轄軍の拡大がはかられ、傭兵はその中心となっていった。そして、各国の王たちが競うように雇ったのがスイス傭兵だ。

国土のほとんどが山地というスイスは、農地も少なくこれといった産業がなかったことから、傭兵の派遣を産業としていた。また、スイス傭兵はパイクという長大な槍の扱いに長けており、騎乗し、馬上槍を構えて突進する騎士との戦いに有効だった。

職業軍人である彼らは自兵戦でも優秀で、フランス王家やローマ教皇のように衛兵として雇った例もある。

このように、傭兵は中世から近世にかけて戦場の主力を担ったが、18世紀末に起きたフランス革命以降は愛国心に訴えて国民を動員する国民軍が主流となり、傭兵は次第に姿を消していくことになる。

傭兵は、いわばプロの兵士。自分の生死がかかっているだけに、武具の手入れは怠らない。

まおゆう
魔王勇者

第三十七話

第三十七話
なぜここにあれがある

これは
いったい……？

聖王都
聖光教会　大礼拝堂
まさか
忍びこむことに
なるとは…
正面から入ることを
断られたのですから
しょうがありません
貴女って
見た目よりも
大胆だよね
そうですか？

この娘…
たぶん
特別なんだ
意志を持って
歩いている
あたしが音楽を
選んだように
「何か」を
選んだ娘なんだ
ここまで
来たんだ
貴女の目的に
付き合うよ
「聖蔵」は
あとまわし
ありがとう
ございます
では
この間の
物語を
精霊五家の？

ここなら
もっと詳細な
モノがあると
思うんです
贖罪の子にして
黒き羊の少年は
その禁じられし
恋ゆえに
その従兄弟にして
大地の精霊王と
呪われし
魔峰にて
互いを滅ぼし合う
砕けたるは
黒き大地のオーブ
宝珠の威力もて
大地は引き裂かれる
精霊は相争い
五家の結束は
永遠に失われ
和合することなし
互いに争い
激しい戦火を交え
滅びの闇に沈む

救世を
願う少女は
炎に生まれし
いと聡き娘なり

少女の
選びし答えは
世界

愛しき少年の
指先を離し

すべての
命の守り手と
なることを願い

残るすべての
オーブをかき抱き
その身を光に変える

生きとし
生けるものの
護り手

我らが
恩寵の主なり

——なんだか悲しい話だね
恋をしたのが禁じられた掟のために選べない相手で
それでも結ばれたいと願ったら
世界が壊れちゃうなんて
五つの精霊家…
引き裂かれた大地…
炎の精霊の娘が光になって…
光…
光の…精霊様…？
あ
ピラ…
それは？
同じ箇に巻いてあったみたいだね
書類…かな？

なんでしょう
契約…
でしょうか
これは…
四代目
「琥珀の焔」と
大主教の…
え
えっ!?
水!?
いえ
砂…?
わぷっ
手を

ここは…？
映っているのは地上の情景…？
戦争が…
女騎士様…!?

ザワ…
ザワ…

霧が出てきたな
ハイ…
蒼虎族接近！
全軍射撃準備
まだ撃つな
引きつけるぞ！
ジャキ
ギャ
ガッ
思ったよりも大盾の装備は少ない様子
これならばこちらの弓矢でも効果は充分だ
……
あれはまさか

距離よし
……
将軍…？
……!!
撃てえええっ！
ヒュヒュヒュヒュヒュ
あ
あ
あ
あ

進め！
どうした
進め！
ダメだ！
弓矢が
壁みたいに！
ヒュ
ヒュ
ヒュ

なんてこった…
怯むな！
撃て！
しかし！
相手は白夜国の！
ためらうな！
すべての責は私が負う！
彼らは武器を持って立ち向かって来る兵士なのだ
――今は考えるな
持ちこたえよ！
我らが後方には二〇万人の三か国開拓民がいるのだ！
一歩退けば崩れるぞ！
おお…
おおっ

なかなか
手ごわい
ようだな
すぐに崩れると
思っていたが

奴隷では突破できんか
前に出るぞ
奮闘の力を見せよ！
今だ！
騎兵突撃！
敵の重装歩兵の脇腹を突け！
混乱させよ！
わぁぁ あああ

どうだ？
我が軍が押していますな
しかし敵は思ったよりもしぶといようで
敵の中心はあの女司令官か

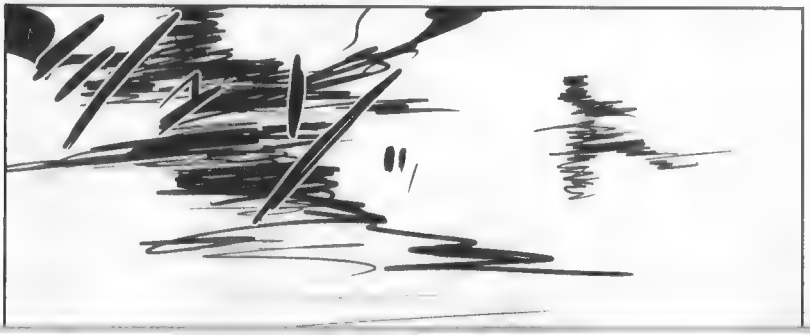
研いだ刃のように美麗な…
若の好みに照らせば未成熟だろうが
清冽な蕾も美というものだ

敵の女司令官を生け捕りにせよ！
捕らえた兵には二階級特進を約束する
おおお
予備兵力五〇〇〇を投入せよ！

敵の一部が突出！
こちらに向かって殺到してきます
食いついたか
敵の攻撃をいなしつつ本陣を後退させる
ドドド

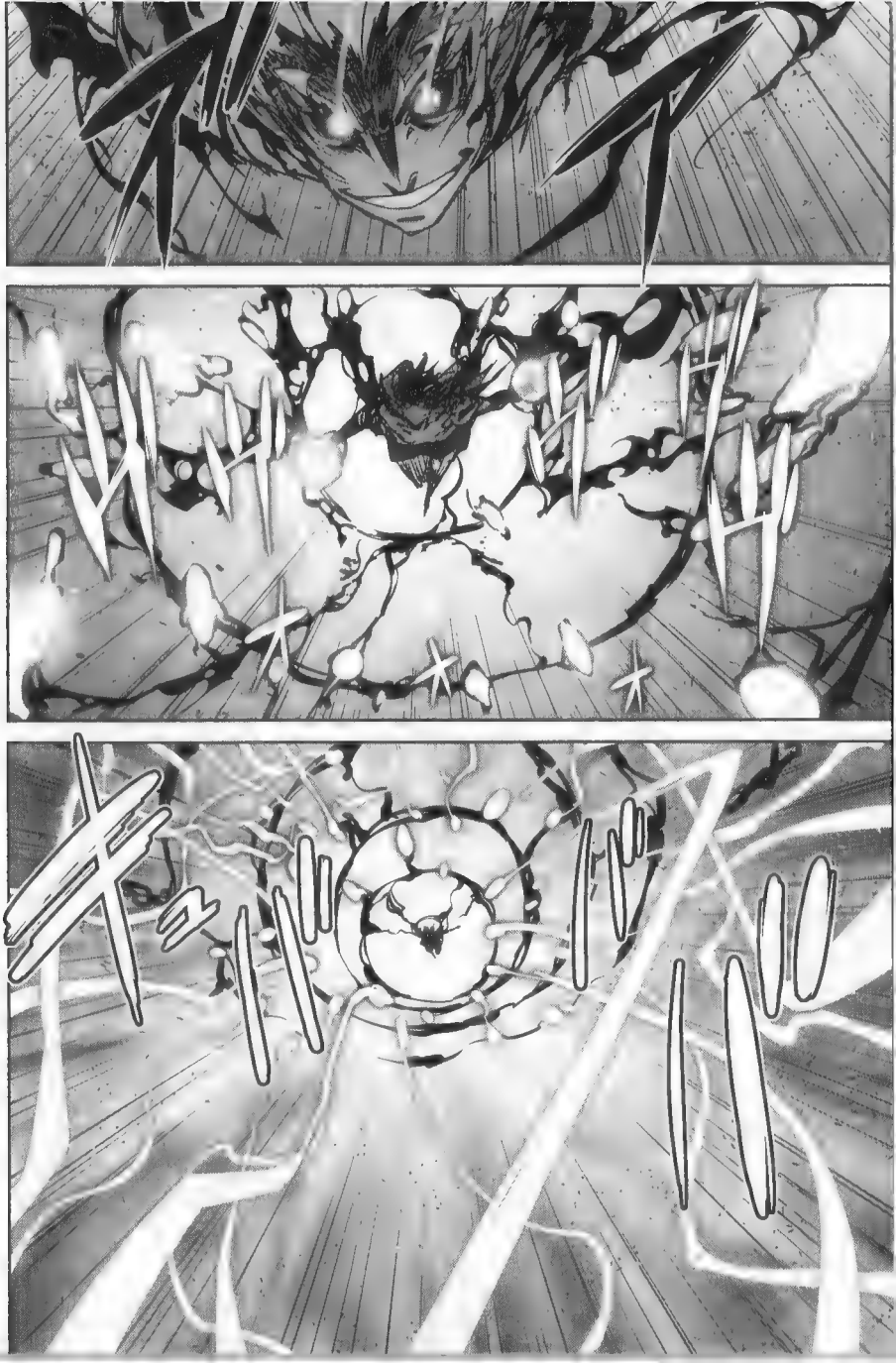
ククク…
感じるぞ
流れる
人の血を
苦悶の叫びを
憎悪と悲嘆を
我の力となって
流れ込んでくる
貴様も
感じるであろう
勇者よ
哀れな民を
助けなくて
よいのか？

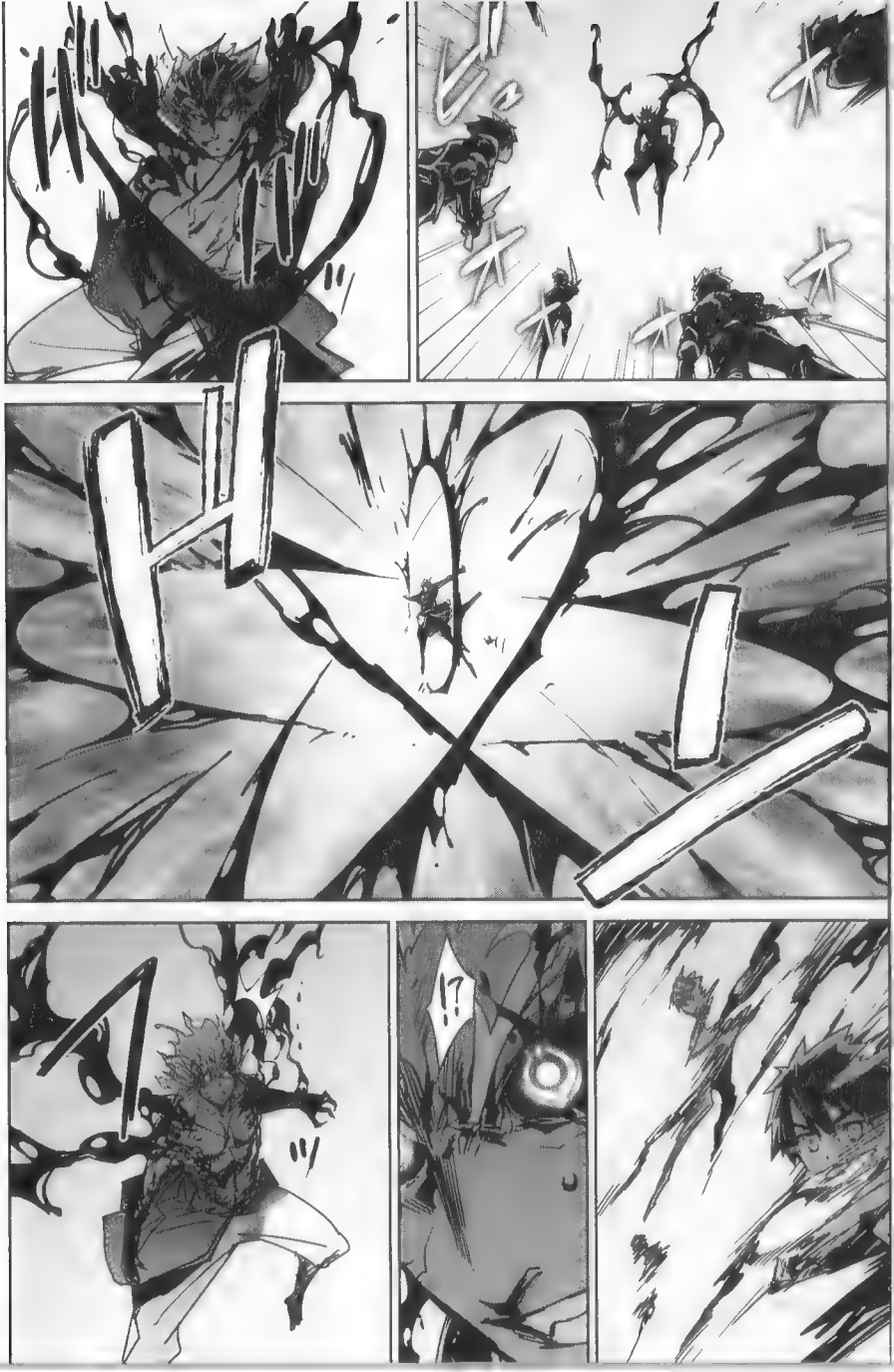
あっちは
信頼する仲間に
任せてある
俺の相手は
魔王のなりそこない
ひとりで楽なもんさ



ゴゴゴゴ
ハァ

ゴゴゴ
ゴゴゴ
ズズ…ン
ゴゴゴ…





クッ
さすがに勇者だけのことはある
我が刻印が教える最大の宿敵よ
…その戦闘力は我を超えることも今や素直に認めよう
だが
だからといって勝敗は
それとは別だ！

やはりな
忽鄰塔のときも
そうだったが
民や街の
被害を防ぎながら
戦うとは愚かな

お前!?
わざと街を

お前の体も心も弱点だらけだ
お前はこうして街の被害を見過ごすことすらできない
貴様の力が我より強かろうと
常に攻撃する側——
すなわち我が有利なのだ
防御とは攻撃が発生する前には無意味な行動
つまりその本質からして手遅れなのだ
けっして厄災は防げぬ
否！
厄災が起きてこそ初めて存在しうる
それがこの勇者の摂理
救済の真実!!
そうだろう？
勇者！

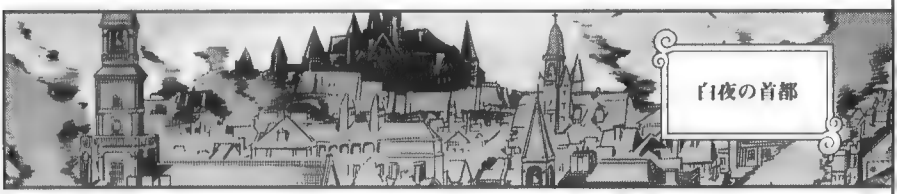
もらったッ

黒き鎧よ！
汝が名にかけて
敵の攻撃を
吹き飛ばせ!!
何!?

その鎧は
魔王のもの
なぜそれを
使いこなせる!?
知ったことかぁ!
誰かが誰かを
助けようとするのが
全部手遅れだと!?
それが
摂理だと!?
したり顔で
語ってんじゃ
ねぇ!

これは!?
ごきげん直伝の
気象制御呪文の
強化版だ
俺とお前ごと
ふっとばす
嵐の結界
まずはもっと
ましな場所へ
いこうや

お
のれェ
ゴオオ
オオオ
オオオ


白夜の首都

チッ
オレも戦場に出て武勲を立てたかったぜ
そりゃ残念だったな
ああ
……!?

ズズ…
ゴギッ
キリキリ
トス
！
ズギッ
鐘楼制圧！
続いて
兵舎に向かう
この鐘楼から
援護頼む
ああ

難民や市民が
閉じ込められて
いたら即座に
解放して
食料と
衣服だけを持って
逃げ出すように
言え！
財産や
荷物を持って
いこうとしたら
やめさせろ！
動きが遅くちゃ
話にならねぇ！
とにかく
逃げ出させるんだ！
お
お
ゴ
ア
ア
ア

あ…
あんたたちは
いったい…？
へへっ
正義の味方
ってやつかな
バカが
調子に乗んな
雇われて
てめぇらを
助けに来た
荷物なんか
放っておいて
北西の森を目指せ
おお
スカした
兄ちゃんと
うまいメシが
待ってる！
あぁ…
つん
つん
隊長さん
これ…
おみず…
お…
おう

ありがとね？
うるせぇや…急ぎな！
こういうのも悪くないもんスね
へへっ
？
…叔父貴？
…イヤな予感がしやがる
制圧と避難を急がせろ
ハイ！

俺の鼻がまだムズムズしやがる
こんな時は決まって悪いことが起きるんだ
右翼槍兵は五〇歩前進！
陣形を維持せよ！
最右翼より弓兵で援護！
連携により間隙を与えずに攻撃せよ！

左翼騎兵隊
戻りました！
ガヤッ

ご苦労！
諸君らのお陰で
十五の中隊が
退却に成功した

感謝とともに
ゆっくりと休憩を
与えたいのだが
なにを
おっしゃるか！
ははは
将軍らしくも
ありませんぞ

我ら敵中突破から
戻りましたが
未だに意気軒昂！
おお
次なる下命を
お待ちいたします

私はお前たちを誇らしく思うぞ！
槍兵を整理して戦線を一瞬あける
陣形の中央やや左翼から飛び出して蒼魔軍後方を攪乱せよ！
ものども！姫将軍のご命令だ！
蒼魔とかいうやつらに一泡吹かせてやるぞ！
おおお
ドドド

だが
こちらの犠牲者は
ほぼすべて奴隷
どこまで
その意志が続くか
見物だといえような

ふむ
崩れないな
敵も
よく持たせて
おりますようで

…歩兵大隊！
は！

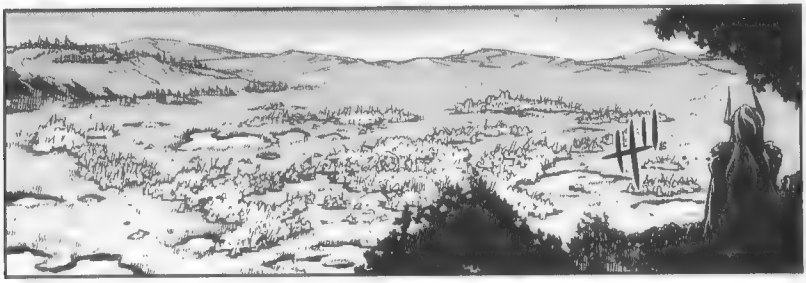
督戦隊に代わって
奴隷どものケツを炙れ
侵攻ラインを
後方から
押し上げよ
奴隷を盾として
中央丘陵地帯に
橋頭堡を築くのだ！
おっ

フン…
人間どもめ
悪あがきは
ここまでだ
我らが蒼魔軍
本隊が動けば
貴様らなど
ひとひねりよ

行け！
蹂躙せよ！

将軍！
左翼騎兵隊が敵に囲まれております！
私が行く！
ここを頼む！
ハッ
ガッ

まだだ…
いますこし
もうしばらく
時間を稼がねば…



どうやら
間に合ったな
我らが氏族に
汚名をかぶせた
憎き蒼魔ども…

魔王様
ご下命を
ああ

獣牙の勇士たちよ
その猛き牙と爪で
蒼魔のはらわたを食い破れ!!

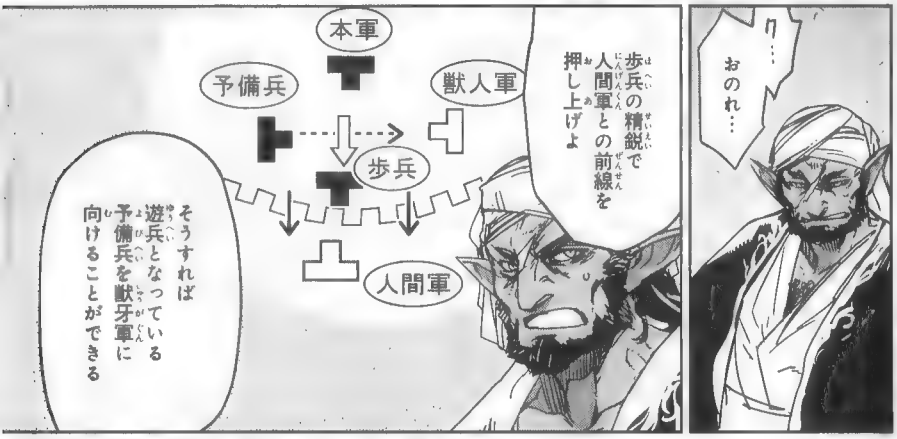
な…
なんで！
敵襲！
敵襲！
何が起きた!?
敵襲です
すごい数の
獣人が
獣人…だと

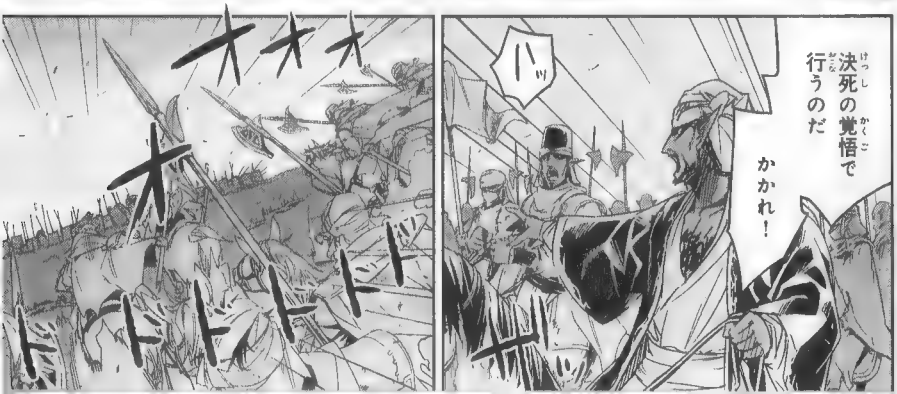
なぜ獣人どもが!?
クソ…
湿地に足をとられて
バシャ
ズズ
きゃあああ
我ら獣牙族は足場の悪さなどものともせぬわ！
裏切り者の蒼魔族に天誅を与えよ
わあああ
ドドドドドドドド

やめよ！
無能者が
前の人間軍に
脇腹を見せる
つもりか!?
反転！
重装歩兵団を
反転させよ！
ドドド

ヒヒーン
ヒヒーン

魔族の誇りと
正義を知るがいい
我らが獣牙は
卑怯者などに
負けはせぬ
オオオオオ

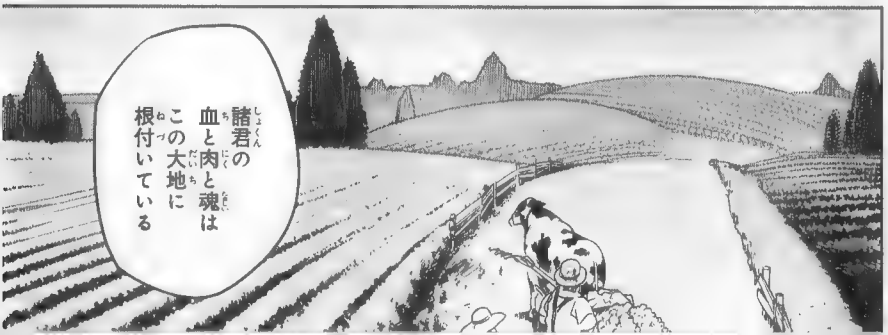

ク…
おのれ…
本軍
予備兵
獣人軍
歩兵
人間軍
歩兵の精鋭で
人間軍との前線を
押し上げよ
そうすれば
遊兵となっている
予備兵を獣牙軍に
向けることができる


ハッ
決死の覚悟で
行うのだ
かかれ！
オオオ
ドドドドド

圧力が上がった!?
いったん退いて態勢を…
ざわ
!?
一歩も退くな！
これは好機だ！
この動きには焦りが見える
押さざるをえない事情が敵にはあるのだ
我らが退けばそれだけ敵の有利になる
私も出る
諸君！
南部諸国の勇士たちよ！

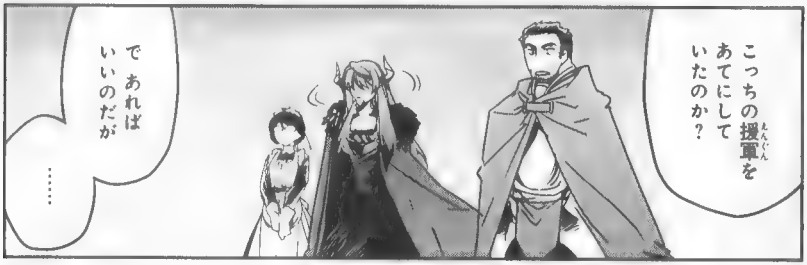
聞け！
南の凍土の
勇士たちよ！
この一戦の
持つ意味を
その魂に刻め
故郷を
護るために
一歩も退くな！

ここは諸君と
諸君の父祖が
開拓した故郷だ
ひび割れた手で
苗を植え
背丈を
超えるほどの
大岩を動かし
凍り付いた
大地に鍬を
打ち込み
雪の中で
春の訪れを
待った


諸君の
血と肉と魂は
この大地に
根付いている

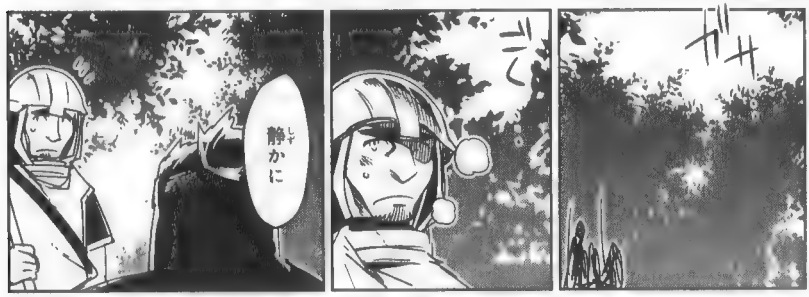
眼前を見据えろ！
魔族だから戦うのではない！
やつらは侵略者だから戦うのだ
我らが土地を侵し踏み荒らす者を許すな！
おおお
おおおおおお
気に食わないな
どうしたんですか？
いや…
女騎士は何をするつもりだったんだ

？
あの中央丘陵の徹底死守では？
……
あの姉ちゃんは
あんだけの
用兵家だ
ジリ貧なのは
見えていた
だろう


こっちの援軍を
あてにして
いたのか？
であれば
いいのだが
……

そんなふうに
考えごとを
していると
泥が跳ねて
汚れてしまい
ますよ
戦場だ
仕方ねぇよ
泥――

銀虎公に
至急伝令！
西方に
向けて転進
全速だ！
退却を
始めるぞ！


ガサ
ゴソ
静かに

前線が気になるで
ござろうが
拙者たちの
役目はこちらで
ござるよ
女騎士殿の
作戦の要…
工兵を守ることに
集中するでござる

後方から
未確認の部隊
接近
人間の軍です
？
この時期に
どこの軍が…
ゴオオ
ガサゴソ
な
何の音で
ござるか
ドオオ
焦げたような
臭い…？
何が…
ドオオ
将軍！
獣人が
撤退して
ゆきます！
なんだと？
…なぜだ
やつらは
優勢に戦を展開
していたはず
だが好都合だ

報告！
後方に敵部隊出現！
何だと？

日が落ちる前に前方の人間の部隊を一網打尽にするぞ！
全軍前進！

後方に聖王国の軍が出現しました
最低でも三万
聖王国だと？
ククク
それは援軍だ

…連中どうやら待ちきれなかったと見える
あの硝石とやらが喉から手が出るほどほしかったのだな
参謀殿も気が早い

ゴオオオオオン…
!?
なんだ…？
この音は…
将軍！
聖王国が
未知の武装により
我が軍を攻撃！
我が軍後衛部隊は
すでに全滅！
な
なん…
だと…！
はぁ！
はぁ！
まおー様
しっかりして
ください
な
なぜだ
なぜここに
あれがある

いつの間に…
どこから
これほどの
数が…
ゴォオ…
ドォン…
あれは
蒼魔など
よりもずっと
恐ろしいものだ
ドォオ
ゴォオ
ゴォオ
ドォオ
はぁ
はぁ
はァ
はァ

あれは
人間の部隊!?
!!
待て！
遅い！
これで逆転だ！
逃げろ！
どこの軍勢だか
わからないけど

!?
な！
ア
ア
ア
こ
これは！
身体が
じゅ
ばくされる
集団法術の
呪縛…か？
しかし
この威力は十人や
そこらじゃない…ぞ

…こんな場所で
なんでこんな
大人数儀式を
これしき…ッ
術者どもを灼き尽くせば
どういうことは……！
!!
やめ…

なんだ
コレ…
ガハッ
鉄(テツ)の…
玉(たま)？

撃ち墜としたようですわ
墜ちよ…
…堕ちよ…
明星よ…
凶星よ…
我が手に堕ちてくるがよい…
終
第三十七話
なぜここにあれがある

第三十六回

銃器の進化

中国で開発された銃器はモンゴル帝国を通じて西へ伝播。度重なる戦争のなかで改良され、より実用的な武器に進化した。

法術によって強化された弾丸は、歴代魔王の鎧すら貫くのだった。

より速く、より正確な射撃を求めて発達した銃

銃の原型となった武器は、9世紀の初頭ごろに中国の唐で作られた、飛発という武器だと考えられている。飛発は、横に穴が開いた筒を木の板に縛り付けたもので、筒に火薬と丸く磨いた石を入れたのち、穴に火をつけた棒を差し込んで点火、石を発射する武器だった。

この飛発は、のちに火槍という武器にかわり、さらに青銅製の筒を用いた初期の銃が誕生した。これが、ユーラシア大陸を席巻したモンゴル帝国の時代に西方へ伝播。12～13世紀には、アラブ圏でマドファと呼ばれる武器が作られている。これと同じものはヨーロッパでも使われたが、銃と呼ぶには大きく取り扱いも不便で、それほど実用的な武器ではなかったようだ。

15世紀の初頭になると、ようやくマスケットが登場する。初期のマスケットはマッチロック式と呼ばれるもので、火縄を保持する金具を引き金で操作し、火薬に着火、弾丸を発射する。この機構が開発されたことで、射手は狙いをつけながら射撃することが可能になり、ようやく実用的な武器になったのだ。

しかし、着火するために必要な火縄は、悪天候や湿気に弱いという弱点がある。このため、17世紀には火打石の火花を用いたフリントロック式の銃が誕生。装填方法についても、弾丸と発射のための火薬を紙で包んだ薬莢が開発されて容易になった。

19世紀以降、銃の進化が加速。雷酸水銀（わずかな衝撃で爆発する化合物）の発明で雷管が生まれ、確実に弾丸を発射できるようになったほか、銃身の内部にライフリングをほどこすことで命中率も上昇。さらに、薬莢の装填を銃身の後方で行う後装式が生まれ、兵士は伏せたままでの戦闘が可能になった。

こうして進化を続けた銃は、従来の武器にかわる軍隊の主力武器となった。しかし、それはまた機関銃の登場や塹壕戦術の発達、戦車の発明など、新戦術や新兵器の誕生を呼び、近代以降の戦争では従来と桁違いの犠牲者を出すことに繋がった。

こうして見ると、銃が進化した歴史は、科学技術の発展が負の方向にも働くという見本のひとつともいえるだろう。

大量に動員されたマスケット銃兵は、戦闘力が高い蒼魔族ですら一蹴するほどだった。

ただひたすらに、
「聖骸」を求めて南進する聖鍵遠征軍。
彼らの手に握られた「銃」は、
世界の均衡を崩すのに
充分な重さを秘めていた。

狂気と泥濘、
そして血で彩られた「戦争」。
「人間」によって撃ち抜かれた勇者は、
信頼が崩れ落ちる様を
目の当たりにする。

希望だけでは進んでいけない。
勇者の魂に、最大の試練が襲い掛かる。

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」

コミックス第12巻

'14年10月発売予定

Kadokawa Comics A

角川コミックス・エース

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」⑪

漫画 **石田あきら**　原作 **橙乃ままれ**　キャラクター原案 **水玉螢之丞・toi8**

2014年7月26日初版発行

発行者
堀内大示

発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3　電話／(03)3238-8521(営業)
http://www.kadokawa.co.jp/

編集　**角川書店**
〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19　電話／(03)3238-8719(編集部)

装幀・デザイン
沼利光(D式Graphics)

印刷 **共同印刷株式会社**　製本 **共同印刷株式会社**

初出／「月刊コンプエース」'14年5月号～7月号

本書の無断複製(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。KADOKAWA読者係までご連絡ください。(古書店で購入したものについては、お取り替えできません)
電話049-259-1100(9:00～17:00/土日、祝日、年末年始を除く)
〒354-0041　埼玉県入間郡三芳町藤久保550-1

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体名とは関係がございません。

2014 KADOKAWA CORPORATION, Printed in Japan

©Akira ISHIDA 2014
©2011 Touno Mamare
ISBN978-4-04-101732-6 C0979